

笑顔を繋ぐ

中 二

入学式の日、日本語が分からないクラスメイトがいることを知った。

知らない言葉が飛び交う空間にすることがどれだけ不安で、孤独で、エネルギーを使うことか、私は知っている。私は、彼女が日本の普通の中学校で生活することがどれだけ大変なことか自分の経験から理解することができた。

私は、カナダに住む従姉を訪ねて一人でカナダへ渡航したことがある。入国時、税関で止められ、トランクの中のものを出されて、いろいろな質問をされた。何を聞かれているか分からないことばかりだった。何とか答えられることがあるかもしれないと、とにかく必死に聞き取ろうとした。数少ない知っている言葉を拾うことで、理解しようとした。いつもの何十倍も集中したため三、四十分のことだったのにひどく疲れたことを覚えている。

相手の言っていることが分からないだけでな

く、自分の気持ちを伝えられないという言葉の壁もあった。税関の人たちも、滞在中に出会った多くの人たちも皆、一生懸命伝えてくれようとしているのは、とてもよく分かった。それだけにうれしい反面、結局理解できず、相手に心配をかけたまま、その場を離れたことも多く、何度も申し訳ない気持ちになった。私の知っている言葉は少なすぎて、一番簡単でありきたりな「Thank you.」という言葉しか返せず、それもまた申し訳なく思った。理解できない、伝えられないという「言葉の壁」は、そこにいることに對する不安になった。その不安から私を救ってくれたものがある。Aさんの笑顔だ。Aさんは、従姉が大学に行っている時間に私を預かってくれた人だ。私がめっちゃくちゃで意味の分からない英語を話しても、彼女の言っていることを理解できなくても「It's OK.」と言っていることも笑いとばしてくれた。困った顔もせず笑顔で「No problem!」と言われると、非常にほっとした。気持ちが軽くなった。Aさんの笑顔は、「自分がここにいてもいいんだ。」と思わせてくれるものだった。言葉の壁はなくならなかったけれど、居場所があるという安心感は

言葉の壁とうまく付き合う余裕を生み、困難に立ち向かう力になった。Aさんは、言葉の壁は心の壁ではないと教えてくれた。

だから、入学式の日、私はそのクラスメイトに笑顔で話しかけ、伝わらなくても笑顔でいようと決めた。

移動教室が分からなかったり、体調不良を先生に伝えられなかったり、彼女の生活はやはり大変そうだった。助けたいと思っても、何に困っているのか分からないことも多く、笑顔でい続けることの難しさを感じた。それでも私も皆も彼女を理解しようとしたし、彼女もとても努力していた。

彼女が仮名を一人で練習していたので、私も一人の友達で手助けをしたことがあった。そのとき、彼女は私の名札を指差して、「あなたの名前は？」というジェスチャーをした。漢字だけでなく、中国語と日本語は読み方が違うから名札では分からないのだと知った。皆同じジャージを着て、同じ髪型をしているのだ。覚えるのに苦労するのは当たり前だ。だから、私はクラス全員の名前の漢字と仮名を書いた座席表を彼女に渡した。「私も全員覚えるのは大変だったよ。勉強もお互

い頑張ろうね。」という気持ちは、言葉では伝えられなかったけれど、座席表を受け取った彼女は「ありがとう。」と手を合わせてくれた。私やクラスの友達の名前を覚えようと思ってくれたことがとてもうれしかった。

合唱コンクールのクラス曲の歌詞をなかなか覚えられず、苦労していたこともあった。私は歌詞の意味を理解できるし、前後の言葉をつなげて覚えることができるけれど、彼女にとってそれはとても難しいことだ。それでも彼女は本番までに歌詞を覚え、皆と歌い切った。「クラス全員」で勝ち取った最優秀賞だった。普段はあまり笑わない彼女と一緒に笑顔になれた日だった。

少しずつ笑顔でのやり取りが増えてきたのに、二期期の終わりに突然彼女が転校すると知った。急なお別れ会で皆からの色紙と歌を彼女は泣きながら受け取ってくれた。言葉で思いを伝えることはできなかつたけれど、これまでの笑顔は彼女に伝わっていたと思えた。Aさんの笑顔が私に居場所を作ってくれたみたいに、彼女の姿は私たちのクラスが、彼女にとって別れが悲しいと思える場所だったと示してくれたように感じた。

自分の存在を認めてくれる人がいる場所は、ここにいたいと思える居場所になる。笑顔は誰かの居場所を作ることができる。そこにはきつと差別は生まれない。私は誰かのために笑顔でいられる人でありたい。